

## 正しさで裁くだけでは

2月14日の灰の水曜日に始まったレントから先週のペンテコステに至るまで、私たちはイエス様の受難と死、復活、昇天、聖霊降臨という一連の出来事を思い起こしてきました。今日は聖霊降臨節第2主日ということで、三位一体の神様を記念する三位一体主日の礼拝を神様にお捧げしています。三位一体主日と言いますと、私たちはなんだかとても難しい教義について考える、そんな肩のこる日のように感じてしまいます。ですが、この日はそのように三位一体という教義について難しくあれこれと考える日というよりも、むしろイエス様の受難と死を見つめ、その復活を知り、聖霊降臨を祝った私たちが、大きな救いの出来事を振り返りながら、父・子・聖霊なる神様の働き全体を味わう日だと考えた方が良いでしょう。

歴史の初めに父なる神様として天地を創造された方が、どうしても罪から離れることのできない私たちを憐れに思って、子なるキリストとしてこの世にやって来られた。そうして御自分を犠牲にして私たちの罪を贖い、私たちの救いを成し遂げてくださった。そして、キリスト昇天後も聖霊として私たちの傍にいまして、私たちを終わりの日の救いに与らせるべく、私たちのために様々に心を砕きながら、私たちを導いてくださっている。

このように、ある時には父なる神様として、ある時には子なるキリストとして、ある時には聖霊として、様々に姿、立ち位置を変えながら私たちの救いのためにダイナミックに働いてくださる三位一体の神様の恵みを思う時、私は神様が私たち一人ひとりに、「私は絶対にあなたを見捨てはしない。人知も超えて、あらゆる手立てを尽くしてあなたを救いへと導いてみせる。だから、私のこの愛に信頼しなさい」と、優しく、そして力強く語りかけてくださっているように思えてくるのです。教会に集う私たちは一人ひとり、神様のこのダイナミックな、そしてどこまでも近い愛に包まれて日々の信仰生活を過ごしています。先週より、私たち、聖霊の導きに従って皆で教会を建て上げて、この地に神様の御心を為していく聖霊降臨節の時期を過ごしておりますけ

れども、この時期、父・子・聖霊なる神様がいつも私たちの救いを心に掛けてくださっていること、また私たちを用いて御自分の御旨を豊かに為していきたいと願っておられることをしっかりと心に刻みながら、良き信仰の応答の時を過ごして参りたいと願っています。

さて、そんな今日は聖書の中からコリントの信徒への手紙一 6 : 12～20 を取り上げさせていただきました。新約聖書にはパウロが書いたと記されている手紙が 13 書出てくるのですが、その中には本当にパウロが書いたものもあれば、そうでないものも混じっています。そしてこのコリントの信徒への手紙一は、パウロが書いたもので間違いないだろうと言われている手紙です。コリントの町の教会はパウロによって建てられたのですが、パウロが離れた後、教会には様々な問題が生じてきました。教会を離れても手紙、あるいは人づてに教会内の動き、信仰状態、諸々の問題を把握していたパウロは、牧会者として問題解決に当たるべく、この手紙を書き送ったのです。

この手紙をざっと読みますと、1～4 章ではコリントの教会内部で起こっていた紛争問題について、5～6 章では教会内部の問題について述べられ、7 章以降ではコリントの町の教会から届いた質問に対する回答が述べられています。今日の聖書箇所は 6 章ということで、教会内部で起きていた問題についてパウロが述べている箇所なのですが、では具体的にコリントの町の教会ではどのような問題が起きていたのでしょうか。

5 章に遡りますと、そこにはこのように記されています。「現に聞くところによると、あなたがたの間にみだらな行いがあり、しかもそれは、異邦人の間にもないほどのみだらな行いで、ある人が父の妻をわがものとしているとのことです。」この「みだらな行い」と訳されている言葉は聖書が書かれたギリシア語では「ポルネイア」と言いまして、これは「ポルノ」の語源となった言葉に他なりません。この言葉は不適切な性的関係のすべてを意味するとされていますが、特に「売春」という意味合いが強い言葉でして、コリントの町にはそのアフロディテを祭る神殿に多くの神殿娼婦たちがいて、「売春」というセックス産業でその名を轟かせていたのです。そしてコリントの

人々の性に関する自由な感覚、雰囲気に影響を与えていて、教会員にも買春を行う者がたくさんいたようです。そしてその性的不道徳がエスカレートして、「ある人が父の妻をわがものとしている」というような事態まで生じていたのです。

そこでパウロは5章で、そのようなことをする信徒の戒規について語ります。「こんなことをする者を自分たちの間から除外すべき」だと勧めるのです。そしてさらに今日の聖書箇所、キリスト者として自由をはき違えてはならないこと、イエス・キリストの十字架の贖いのゆえに私たちはもはや律法から自由とされたのだという自分の主張が、性的にやりたい放題して良いという理屈に向かうようなことがあってはならないこと、むしろ感謝の応答として主に従っていこうという理屈に向かうべきことを教えます。そして15～17節で娼婦と交わるのではなく、主と交わるべきことを述べ、最後に「ポルネイア」は神の住まいである自分の体に対する罪であるゆえに避けるべきことを勧めるのです。あなたがたはイエス・キリストの十字架という尊い犠牲、代価によって罪の中から買い取られ、贖い出された存在なのだから、「ポルネイア」を行うのではなく、「自分の体で神の栄光を現しなさい」とパウロは懸命に訴えます。

こうした今日の聖書箇所、実は今月の初めに聖書研究会で取り扱ひまして、皆で学びを深める機会を持ったのですが、この聖書研究会の準備でこの聖書箇所を読んだ時、何か引っかかると言いますか、心に違和感のようなものを感じたんですね。ただそれをはっきりと言葉にできなくて、聖書研究会では結局その違和感には触れずにレジュメを作成して発題をさせていただいたのですが、その後のフリートーキングの時にある方から、「パウロの主張は非常に明確で分かりやすく、理解できたのですが、今ホストなどの問題、また複雑な家庭環境でDVを逃れて家出をするなどしてお金に困り、売春をする人が社会問題になっていますが、そうした人がこの聖書箇所を読んだら傷つくのではないか」というご指摘をいただきまして、その時に私が感じていた違和感というものがはっきりしたような思いがいたしました。なんとと言いますか、今日の聖書箇所のパウロの言葉からは、娼婦(ギリシア語で「ポルネー」と言いますが)、こうした人々に対する愛と言いますか、寄り添う気持ちが微塵も感じられないのです。

ここで当時のお話をいたしますが、古代のギリシア・ローマ世界では女性の「娼婦」も、男性の「男娼」も、奴隷制と売春構造によって人間的、性的、経済的にひどい搾取を受けていたことが疑いようのない事実として知られています。「娼婦」も「男娼」も捕虜や誘拐によって売春宿に売られ、その身を売ることを強要され、「買春者」に供されていた、そしてその売り上げを搾取されていた訳です。

こうした人々の痛みを思いやる気持ちや、こうした社会的不正義を何とかしなければという気持ちを、パウロの今日の言葉から窺うことはできません。そこにあるのは売春(ポルネイア)を、異教世界の「背信」と「偶像礼拝」の結果生じた性的不道徳、異教世界の悪徳として「娼婦」と共に断罪し、軽蔑する気持ちだけです。今日の聖書個所の15節と16節は、娼婦を買った側のコリント教会の男性会員に娼婦の汚れが移るという酷い偏見をパウロが振りかざしているテキストに他なりません。当時の売春構造、その背後にある問題をまったく顧みることなく、ただ「こうした罪人に近寄るな。汚れが移る」と言う。それで果たして良いのでしょうか。

私は今日の聖書個所から窺えるパウロの態度が、非常にファリサイ派的に感じられました。ファリサイ派というのはイエス様の時代、またパウロの時代に存在したユダヤ教の一派です。この名前はヘブライ語の「ペルシーム」(「分離した者」)に由来していて、自分たちを正しい人々と認識し、自分たちが「罪人」と見なした人々から自分たちを「分離した」とされています。しかしながらこうした生き方は、「罪人」とされた人々のその現実の中に入って行き、その救いのために働かれたイエス様の生き方とは正反対のものです。

今の教会の在り方を考えた時に、私たちが「自分の体で神の栄光を現」すように生きていくことを考えるのは良いのですが、ただただ「売春」というのを軽蔑し、これに関わる人々を「罪人」と冷たく断罪するだけでは話にならないでしょう。正しさで人を裁くだけでは、神様の御心は成りません。

もちろん当時の売春構造と今の売春構造は違いますから、そこにある問題がまったく同じというわけではないでしょう。それでも人間的、性的、経済的搾取など様々な問題があるのは一緒で、むしろ今の方が問題は複雑になっているのかもしれない。いずれにしても売春ということを語るなら、その背後にある問題をしっかりと見据え、その問題解決のために関わっていく、そしてその問題の中にいる人々の救いを考えていく、そこまでが教会の使命だと私は思うのです。

願わくは私たちの教会が、正しきで冷たく人を裁くだけの群れとなってしまうことありませんように。地域の課題、社会の課題と自分たちを切り離すのではなく、そこに関わってこの世界に救いを実現していきたい。神様の御心を為していきたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——